

名著に学ぶ経営 ～ その6：名君、名将に学ぶ

歴史上の名君、名将はまさに経営者にとって手本であり、反面教師を含め並べたら切がない。西洋であればマキャベリは、まずはモーゼ、テセウス、ロムルス、キュロスの4人の名を挙げているが、最初の3人は半ば神話の人物であり、実際に歴史の中で記録されているのは最後のキュロスのみである。ペルシア王国を起こしたこの偉大な人物はまた、寛容な人物として知られ、ユダヤ人をバビロンから解放したのもこの人であった。しかしこの人を描いたクセノフォンによる伝記では最後まで立派な人物で、息子たちに教訓を残して安らかな死を迎えるのであるが、一方ヘロドトスによる記述では、異民族との戦いで血気にはやっであっけなく戦死してしまう。このような古い記述は単なる伝承であり、実証がなされたわけではないので、記録自体が信じがたい。続く時代のアレクサンドロスやカエサルは古代において最高の英雄とされるが、私としてはアウグストゥスのような堅実な人物の方をより高く評価したい。近世に至ってピョートル大帝やフリードリヒ大王の開明性は学ぶべきだが、頂点とどん底を極めたナポレオンなどは、むしろ反面教師の最たるものと言ってよい。

一方、中国にも学ぶべき優れた人物が多い。短期政権に終わった始皇帝や項羽はむしろ反面教師とすべきであるが、ちょっとひやひやものだが前漢を起こした劉邦や、派手さはないが後漢を起こした劉秀などは最上級の人物である。三国時代の曹操、劉備、孫権となると、それぞれが短所も持ち合わせ、甲乙が付けがたい。むしろこれらの方が生身の人間として親近感すら感じられる。このような国を興した人物も素晴らしいが、二代目、三代目としては国を安定・発展させた君主、たとえば、李世民、永楽帝、康熙帝などの方も学ぶべきところが多い。その一方国を亡ぼす原因となった人物達も、戒めとして知っておかなければならない。始皇帝や煬帝のように国を破壊したと言っても良いような人物は言うまでもなく、崇禎帝、西太后など時代の変化に抗しきれずに沈んでいった人物も注視しなければならない。他のアジアでもインドのアショカ王やアクバル、朝鮮の世宗、オスマン帝国のスレイマンなども桁違いの偉大な人物である。

日本においても決してそれらに劣らない。まずは聖徳太子が挙げられる。征服者を英雄とする時代、平和を重んじた数少ない人物である。現代の研究では、かなりの部分が虚構とされるが、後世の人が望んだ理想の君主像に他ならない。源平の合戦の時代にも興味深い人物が多いが、経営者としては義経より頼朝、頼朝より北条氏に学ぶべきであろう。南北朝の動乱にしても楠正成や後醍醐天皇よりも、足利尊氏に軍配が上がる。戦国時代の三英傑、信長、秀吉、家康も日本人として手本にしなければならないが、三人三様の人物像に優劣を付けるよりも、国造りの段階の違いと考えなければならない。創業時は信長に倣うべきであるし、発展期は秀吉に、安定したら家康のやり方に移行すべきであろう。中小企業の創業者などは、一人でこの3人の役割を負わなければならない場合もあり、この3人のまねを順にしていけることができれば、創業した会社を永続的な企業に持って行く事ができるであろう。歴史上の人物にはいくつかのパターンがあるので、その時の状況にあった人物を学ぶべきだろう。